

No. 48

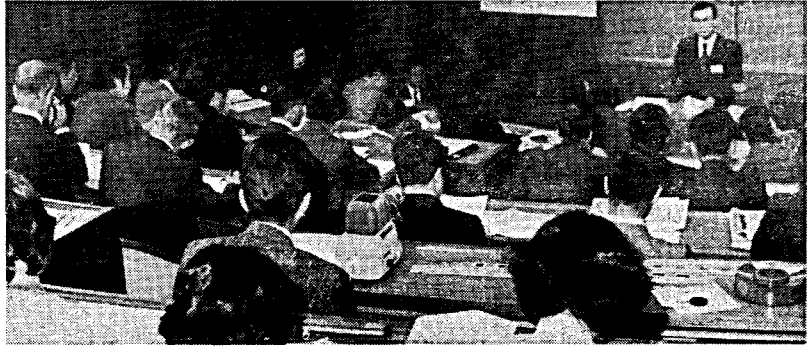
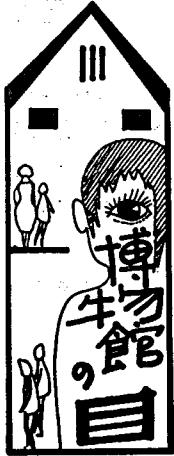
1979.

12. 1

# 岐阜の博物館

編集兼発行

〒483 羽島郡川島町  
エーザイ工園  
内藤記念くすり博物館内  
岐阜県博物館協会  
TEL (058689) 3111  
内線 540  
振替 名古屋 70106



## 三重博物館協会交流研究会

去る11月12日13日の両日、内藤記念くすり博物館を会場に54名が参加。「歴史資料館開設までのあゆみ」明方村立歴史民俗資料館々長金子貞二先生、「カモシカの仲間と日本カモシカの現状」日本カモシカセンター伊藤武吉先生、「展覧事業の企画のすすめ方」名古屋市博物館西田躬穂先生の発表後、質疑応答、情報交換会がもたれ、夜の懇親会に続いて深夜まで熱烈な情報交換・討議、親睦がなされた。翌13日は、くすり博物館・岐阜県博物館等の見学があり、次回三重県での再会を約して無事全日程を終了した。

云い古されたことではあるが、博物館界は、各館園の経営母体、扱う資料、その目的とするところ、まさに千差万別種々雑多、そういうものがどう組織化され、何を共通の寄りどころとして結集できるのか、議論が分かれるところで、課題も山積している。しかし、逆に云えば、まだまだ一般にも社会的にも、博物館とは何であるかの認識が立遅れている日本の現状であるだけに、博物館の最前線で日夜悪戦苦闘していることに若い館園人の、横の連がりをめざした語らいと交流の場の確保は重要である。(K.H)



## 美濃陶磁歴史館

▽ 509-51 土岐市泉町久尻1268

TEL (土岐) 5-1245

土と炎の街、美濃焼のふるさと土岐市に、美濃陶磁歴史館が誕生した。安土桃山時代の昔から、志野・織部・黄瀬戸として親しまれてきた土と炎の伝統は、現代にもいきづいて、焼きもののまち“土岐”の地場産業となり、新しい産業都市への道を歩んでいる。「文化の香り高い産業都市」づくりの一環として、文化会館横の図書館が移転新築されたのを機に、図書館跡に建設されたもの、瓦ぶきの落着いた和風建築物が、いかにも美濃焼の殿堂にふさわしく、木造づくりの内装が心暖まる雰囲気をかもし出している。

去る7月25日のオープンから1ヶ月間は、開館記念展として「名陶里がえり」が行なわれたが、今後は年1回ぐらいの特別展も実施されるとか、遅すぎたともいえるのだが、郷土から出土した名もない美濃焼の名品の数々が、檜舞台に勢揃いしたというところである。いよいよ土岐市の新しい文化の顔が光り輝きはじめてともいえる。市内には、国指定史跡「元屋敷陶器窯跡」をはじめ、数々の名品を生み出した古窯が散在し、これらをめぐる野外散策、さらに現在自然環境を生かした広大な美濃陶芸村づくりも

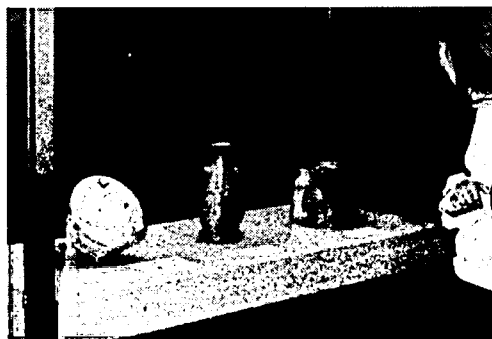


進行中で、これらが整備されれば、美濃陶磁歴史館を中核とした一大教化施設となる。館とそれを取りまく地域社会の中の史跡、そして、明日の陶芸を夢みる現代陶芸家に開放される陶芸村～博物館の使命が、「古き資料によって、未来をみつめ考えさせる場」であることを思うと、野外フィールドをバックにひかえた新しいタイプの博物館登場……として大いに注目される。

日用の実用食器として、陶磁器ほど私たちひとりひとりの生活に密着し、また親しまれているものはないのに、やゝもすると、優美・華麗な装飾品ばかりが、高価な美術品として注目されがちである。そうした一面とともに、やはり庶民の日常生活とのかかわりで、より多くの人々の憩いと学びの場となるような美濃陶磁歴史館の充実発展が期待される。これは、ひとり土岐市の新しい顔であるだけでなく、岐阜県にとっても誇りにできる専門博物館である。

開館時間 10時～16時、休館日 毎週月曜日、祝祭日の次の日、毎月第4金曜日。

入館料 一般200円、高大学生100円、小中学生50円、(20人以上団体 大人150円、高大学生70円、小中学生30円)



## 郷土玩具館

▽ 506 高山市上一之町33-2  
TEL 0577-32-1183



いかにも高山の街にピッタリの建物である。格子戸のある古風な建物の中に入ると、北は北海道、南は沖縄にいたるまでの、各地の郷土玩具がところ狭しと展示されている。

土製・木製・

布製・紙製・竹製……と、その土地土地の生活・風俗・信仰などを反映したおもちゃの数々、人形あり動物あり、遊び器具ありと、その種々雑多さにまず驚かされる。江戸時代の古い物から、明治・大正・昭和に至るこれら民芸玩具のひとつひとつには、味わい深い暖かみが感じられる。当今の大量生産される機械じかけのおもちゃの数々と比較しながら、じっくりみつめてみる必要がある。人間として子どもたちにとって、どちらが夢とロマンに満ちたおもちゃであるかは、結論づけるまでもないだろう。訪れる人々の中で、特に若い人々に人気があり感動を呼んでいることを思うと、この小さな郷土玩具のひとつひとつが、私たちが今日手にするインスタント製品、大量生産商品の冷たさと味気なさへの皮肉と警告を発しているように思えてくるが、いかがだろうか。貴重な資料が多く、それらが見る側の人々へいろんなことを語りかけてくれるのだが、欲を云わせてもらえば、あまりにも展示場が狭すぎるといえる。もっと広いスペースの中で、ゆったりと展示されていた

なら、いっそうこれらの小さな玩具たちと、現代人との語らいが深まり、玩具を通して、人間の文化を、生活のあり方を考える場としての深まりが出てくると思うのだが……

東海郷土玩具会のメンバーであった西尾市の浅井正氏が収集されたものを、浅井さんの死後、「民芸博物館づくり」を夢みておられた氏の遺志を生かし、高山市在住の倉坪安成氏が開設されたもの。故浅井氏のコレクションは、44才の若さで病死されたとはいえ、タコ、からくり人形、土人形など22,000点にも及び、郷土玩具の収集仲間でも随一のものとして評判高かったもの、高山という民芸品の街で公開されたことは、地の利を得て格好の新名所となっている。当世流行の観光土産品とは、味わいも風格もどことなく違い、人間味あふれるほのぼのとしたほんもののおもちゃとして、郷土玩具館で生き返ったという感じがする。

人間が、その生涯をかけて、何かひとつのものに焦点をしばり、徹底的に「もの」を集め保存することは、つまりコレクションは、精神文化活動として最高の生きがいとなるものだが、それをひとりで死蔵しては徒勞にすぎない。何らかの形で社会へ還元してこそ意義があるが、郷土玩具館は、その意味からも、コレクション公開型の地方小博物館施設として、今後の発展が期待される。

休館日：特になし。8時30分～17時（ただし冬期間は17時まで、夏場は夜間まで開館）  
入館料 大人150円、学生100円、小人50円  
修学旅行生70円。



# 民俗資料の整理と 調査カードづくり(二)

明方村立歴史民俗資料館館長 金子貞二

58年5月13日に、民俗文化財担当の調査官天野武氏が立ち寄られた。その折、重文申請の希望があれば、生産部門でやってみてはどうか、たとえば〈明方村の山村生産用具〉ということで、生産関係用具全般と仕事着・飲食灯火用具・信仰儀礼用具、染め織りや手仕事の製品もそれぞれの分野に含めていく、申請書類としては、申請書・収集保存の経過・資料の文化的背景・調査カード・一覧表・総括表・採集地域地図・関係写真集などが必要になると言われ、質疑に対して、

1. 採集地には、村の周辺の地域が含まれていてもよい。
  2. 自家用の分の生産にとどまるとしても、ここでは、それも生産と見なす。
  3. 運搬具はそれぞれの分野に位置づける。
- という見解を示された。

この日を契機に、明方村では重文申請の作業に取りかかることになった。5月25日に、県の文化課に出向いて指導を受けた。それと前後して、天野氏から調査カードの見本と調査カードの模範的記載事例のコピーが送られてきた。事例によると作図は、県で示されたような見取図に寸法を入れ、なるべく特徴をつかんで描くといったものではなくて、第三角法・縮尺によるものであった。

9月末までに調査カード1,600枚作成という、追いつめられるような気持ちも手伝って、単なる見取図でもない、かと言って第三角法でもない、どっちつかずの作図を進めながら、8月上旬、主任調査官の木下忠氏を迎えた。収集保存については褒められたものの、100余の作図は悉く不合格。以前はこれでもよかったが、今日では、到底こんなふうでは難関突破は無理だと言われた。わかっていながら手を抜いた報

いはてきめんであった。これでもって、作図は第三角法・縮尺を用いることが最低要求の線であることが、身にしみてわかった。

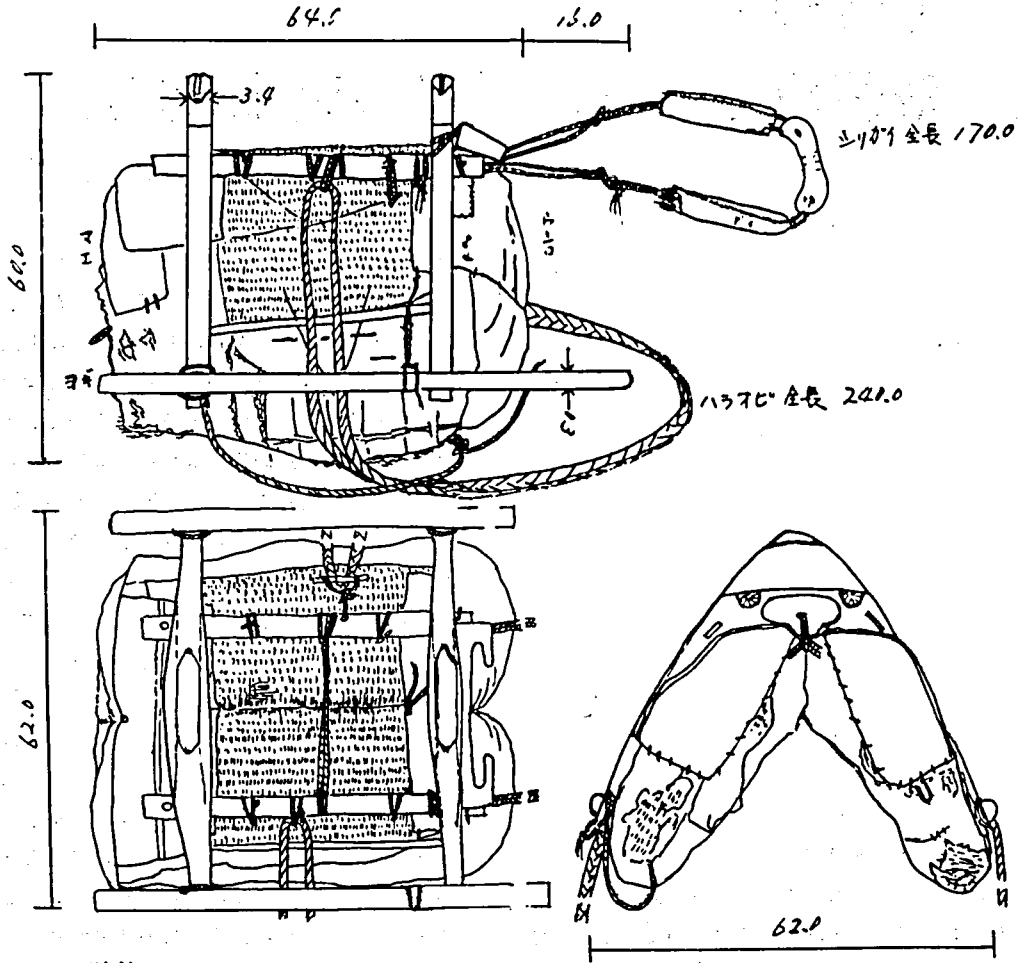
8月中下旬に、調査官による第1次の調査が実施されるというので、1,650枚の調査カードを起こし、一覧表(農耕に例をとれば、耕作・管理・収穫調整に三分し、それぞれの用具を作業の過程を追って配列する。)を作成し、総括表の案を立てた。

検討された結果、体系については、準備した案から鉱山が外され、農耕が焼き畑と一般に中分類され、諸職が加わって、次の11分類となった。1農耕<sup>焼き畑</sup>一般 2山樵 3養蚕 4畜産 5染め織り 6手仕事 7諸職 8狩猟・漁撈 9仕事着 10飲食・灯火 11信仰儀礼

体系の検討に続いて、農耕と山樵の一部について調査が行なわれた。調査は、一覧表の通し番号順に資料を並べ、資料と調査カードを対照しながら進められ、資料の加・除、一覧表の順序の変更が指示された。

第1次の調査を受けた結果、今後は次のような点に留意せねばならぬことがわかった。

1. まず大前提として、それぞれの仕事のやり方を理解しなければならない。機織りについて言えば、準備された糸を、どのような道具を使って、どのように処理し、機にあげ、織り、仕上げるか、その全過程を知り、道具を知り、自分でやれるまでに理解しなければ、何が不足なのかもわからないし、無難な一覧表は作れない。
2. 焼き畑の場合、山へは行って、草や雑木を切り払うところから、収穫して、運び、調整するまでの一部始終を考えて、たとえば手寄りの笹や雑木を利用し、使い捨てにするような道具であっても、必ず調達して



単位 : CM 1/10  
縮尺

- おく。(笹箒・木の股)
3. 収穫調整用の筵が1枚といったふうに、あまりにも品数の少ないものは補充しておく。
  4. 手づくりということが原則であるから、戦後の農機具と言われるようなもの、またミシンで縫った仕事着などは除外する。
  5. たとえば、同一人が、同時に、同類の筵を5枚提供してくれているとして、調査カード1枚を起こして、備考欄に1括5枚と記しておいても5点にはならない。5点申請したかったら、調査カードも5枚作らねばならない。
- かくして調査カードの数は、11月の第2次

の調査までに1,894枚、1月の第3次の調査までに2,033枚となり、提出の際には2,037枚に及んだ。そして、当時、申請可能な収蔵の品数は3,659点であったから、1,622点は割愛したことになる。

11月の第2次の調査の節、体系の一部に変更があり、焼き畑農耕、一般農耕は中分類から大分類に昇格、運搬具が新しく大分類に加わったので、体系は最終的に大分類13となった。この段階での運搬具の独立ということは、その影響が各分野に亘り、一覧表のやり直し、調査カードの組みかえなど、苦しい作業であった。

(続く)

## 飛驒地方，下呂周辺の爬虫類(2)

元 下呂町爬虫類の森勤務 武藤 暁 生

ジムグリはシマヘビに比し、わずかに少なかつただけである。集中槽外ではシマヘビと対比できるほど多くは見つかっていないから、潜在的には下呂周辺にかなり棲息していると思われる。シマヘビ、ジムグリと同属のアオダイショウは一度も入っていなかった。集水槽外の調査からはシマヘビよりも少なかつたが、ジムグリより多く見つかっている。用水路へ落ち込まなかつたのは同種の生活形によるものだったのだろうか。

シロマダラ、マムシも入っていなかった。シロマダラに関しては、この集水槽外で短期間内における3個体の報告があり、「ジョロ(ウ?)マムシ」という本種の地方名もよく名が通っている(武藤 1975)。マムシも町内でその棲息を確認、一部採集した。下呂において兩種共それほど少ないとは思われない。ダカチホヘビは10月にただ1個体入っていたに過ぎない。武藤(1976)は下呂町内のみにおいて、2年間で本例以外8個体を確認している。かつて一般に稀少種とされていたヘビだけに、その数は決して少なくない値である。

イシガメは下呂周辺の河川、水田で時々見かける。この集水槽には1個体しか入っていなかった。クサガメは集水槽外でも見かけなかった。しかし、岐阜県高等学校生物教育研究会(1974)によると本種は、飛驒地方に分布するとされる。

ニホントカゲもただ1個体入っていたに過ぎない。カナヘビは入っていなかった。2種共、他地域に比しそう豊富ではなかつたらしいことは集水槽外の結果からもうかがえた。井上・川崎(1975)は下呂町門和佐流域の爬虫両生虫について報告した際に、ヤモリにも触れているが、本種は入っていなかつたし、集水槽外でも見かけなかつた。

### Ⅲ. 習性・棲息環境など

ヒバカリが集水槽に42個体も入っていたのは注目に値する。本種の棲息環境とされる、水田や小川の畔(ゴリス 1966, 柴田 1968)、雑木林の蔭になった湿地(千石 1967)などはこの用水路間の状況にも一致するものである。少なくとも用水路周辺にはだいぶ棲息しているようである。ただこうした環境はこの用水路周辺に限ったことではない(既述)ので、広く下呂一帯としてその棲息状況を考えてもおかしくはない。従って集水槽外であまり見られず、槽内で多かつたのは、本種の形態と生活形によっていた公算は強い。本種の地味な体色と小形であることは、確かに発見しにくい(千石・ほか 1975)。しかし、それにもまして考えられることは、筆者が歩歩していた日中(=集水槽外フィールドでの調査)、このヘビはほとんど活動していなかつたのではなからうかということである。換言すれば、人目にあまり触れない時間帯(早朝とか薄暮)にヘビは活発に動き回り、その結果としてこの集水槽へ落ち込んだと想像される。下呂での体験ではないが、筆者が現在調査地としている千葉四街道町で、1978年9月26日の夕刻、ヘビが数匹互いに絡み合っている現場を目撃した。陽もかげり始め、うす暗かつたので、最初は何のヘビなのか解りかねていた。雄5, 雌1のヒバカリであった。翌早朝にも、今度は持ち帰った5個体のうちの雌雄一対が、体を接触し合っている光景を観察した。いづれも交尾行動のための寄りそいであった可能性は強い。同町で1977年から続いている調査の中で、本種の大半は雑木林の奥深い、暗く湿った所で発見されている。原(1970)は本種が夜行性であるとまで述べた。この集水槽内の結果とは逆に、槽外の調査では昼行性のシ

マヘビが本種よりはるかに多かったのも、こうした事情によるものと思われる。O'tiver (1947)はヘビの季節的消長の一要因として、人間の野外活動量の各月における違いについて論議した。

集水槽で多数を占めたヤマカガシ、ヒバカリ、シマヘビの3種は、いずれもが両生類食の傾向をもつ。一方、爬虫両生類の全個体のうち主流を成していたのはカエル類であった。このことから用水路周辺に数多く棲息しているこれらのカエルと3種のヘビとの結びつきは、想像に難くない。ところがシマヘビの次に多かったジムグリには野外で両生類食の例は知られていない (Fukada 1959, 内田・今泉 1939)。専ら小型哺乳類、特にハタネズミを好んでいるらしい (Fukada 1959)。主に地上、もしくは地中生活を営んでいると考えられる。こうした潜在的な行動様式が、用水路転落に至り易か

ったのであろうか。集水槽外でアオダイショウはジムグリよりも多く見つかっていることは既述した。アオダイショウは地表より上にも生活域をもつ (登攀的)。むしろ、アオダイショウが常時、樹上生活を営んでいるわけではないが、落ち込む確率は地表と接している機会の多いジムグリと比べて、あまり無いものと思われる。アオダイショウは大型のヘビではあるが、いったん用水路へ落ち込んでしまえば、とてもその用水の流れの速さに抗しきれず、また高い集水槽からはい出すこともできなかったであろう。

シロマダラが落ち込まなかったのは、その種が乾燥した所を好む傾向をもつことを示唆しているのかも知れない。Shibata (1961)はその棲息環境として、石塊やコンクリートブロックが堆積した乾いた場所、ゴリス (1966)は石の多い乾いた所、柴田 (1970)は乾いた杉皮

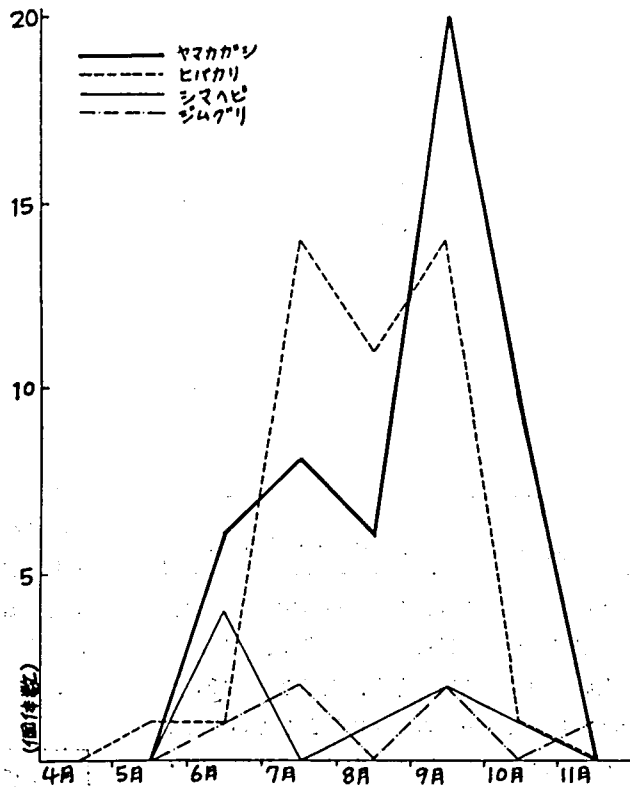


図4. 集水槽に落ち込んでいたヘビ類の月別個体数

の下にひそんでいた1例を挙げている。集水槽外では、軒下に積んだ材木の下 (雨などは当たらない)、石の上、道祖神の台座上に居た例がある。

#### Ⅳ. 季節的消長

月別に落ち込んでいたヘビの個体数をプロットして、季節的な活動の変化を考察してみた (図4)。個体数は少ないが、人為的に探索、採集したものではないので、下呂周辺における出現のだいたいの傾向は把握すると思う。調査回数48回は、爬虫両生類の入っていた場合だけである。集水槽へは行ったが、入っていなかった場合、あるいはいったん集水槽へ落ち込めばほかへは流れてゆかない等の条件を考慮すれば、調査回数がこれらの動物の季節的消長に關与しているとは思われない。



**資料紹介**  
“土人形と中国の仏像など”開催

岐阜県博物館では、寄贈資料の中で、常設展示に出ていなくて貴重なものも多く、今回は、土人形・中国の仏像・考古出土品など約90点を展示し、より多くの方々に鑑賞していただくことにした。大正・昭和にかけて、可見町姫・瑞浪市市原・犬山などでつくられた土人形の素朴な姿、約73点が主体です。通常の入館料のまゝで自由にご覧いただけますので、どうぞお出かけ下さい。

会期 昭和54年12月18日(火)～  
昭和55年1月31日(木)

**織部の絵模様 古川先生の絶筆出版**



岩崎美術社からシリーズものとして刊行されているやきもののデザイン(3)として、古川庄作・竹本紀明編著の「織部の絵模様」が出版されました。

原稿を病床で手渡されたまゝ、去る4月5日に急逝された古川庄作先生の絶筆となったもので、先生の学究の徒としての、また美濃焼をこよなく愛し追求してこられたお人柄がにじみ出ている好著で、写真版も多数あります。定価1,800円、ぜひ各館園の蔵書にお加え下さい。

**博物館学講座4 博物館と地域社会発刊**

本協会顧問広瀬鎮氏の責任編集になる同講座の第4回配本。現代社会と博物館、社会的要請と市民的要求、余暇の利用と博物館を広瀬氏が執筆、他に文化財と博物館、館種別博物館と地域(市民)社会を、鶴田総一郎、金子功氏他多数が分担執筆、日本の博物館界でユニークな活動と実績をもつ岐博協の姿がしばしば論じられています。地域に根づいた博物館活動の指針となり、一読をおすすめします。雄山閣出版発行 定価 2,500円。

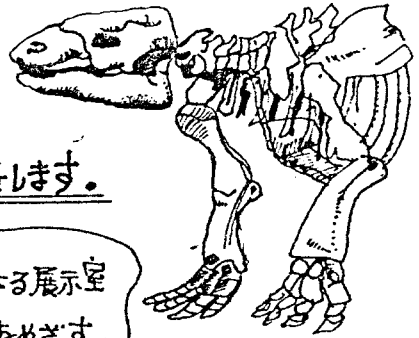
**編集後記**

◎金子先生の玉稿、いよいよ具体的な実践例へと深まった展開に入ります。乞ご期待。  
◎次号は本年度最終号です。増ページを予定していますので、会員諸兄の近況報告、短信、催物案内、新資料紹介等、気楽に何でも原稿お寄せ下さい。(S.O)



# 岐阜の博物館 臨時ニュース

瑞浪市化石博物館は



展示替えによる臨時休館をします。

★博物館展示部門の理念「5～6年周期による展示室の模様替え」を実施し、博物館活動の充実をめざす。

★開館以来収集された新しい標本の中から、代表的なものを追加展示し、展示標本の倍増を図る。

★考古部門の郷土館(進行中)への移転にこぎなひ、展示を再構成する。

- ・地のめぐみコーナーの新設
- ・サメ・貝・植物コーナーの増設
- ・岐阜県の地質と化石コーナー、学習広場コーナーの充実等。

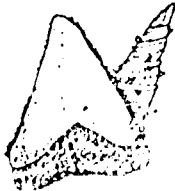
★学問的に新しく判明、定義づけられた事項の、解説文の修正・訂正をする。

12月10日(月)から臨時休館に入り。

来年1月5日から、展示替えによるオープンとなります。

1月5日(土)から1ヶ月間は、

展示替え記念特別展「外国の化石展」を開催です。



ぜひとも、多数お出かけ下さいますよう、ご案内方々、以上、至急連絡致します。

(岐博協機図誌編集子)

## 岐阜県博物館協会セミナーのご案内

本年度最後のセミナーを下記のように開催致しますので、

多数ご出席下さいますようお願い致します。

期日 昭和55年 3月 16日(日) 午後1時30分ヨリ

会場 ワシントンホテル 5F. さざんかの間,  
(国鉄岐阜駅正面)



講師 岐阜県博物館学芸員, 小野木三郎.

内容: 「ヒマラヤの自然と人」(外国隊の入山が許されてはじめて、パラグランド  
屋根の自然及び、ラマ教・ヒンズー教の特色、山岳民族の生活……そのセスライ  
ド上映……)

参加費 無料

——— 岐博協セミナー委員長 吉田幸子 ———